



Data

監督: キム・ドヨン
原作: チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジヨン』(民音社刊) / 斎藤真理子訳 (筑摩書房刊)
出演: チョン・ユミ/コン・ユ/キム・ミギョン/コン・ミンジョン/キム・ソン Chol / イ・オル/イ・ボンリョン

👁️👁️ みどころ

北欧諸国とは大違いで、韓国は日本と同じくジェンダーギャップ指数の順位は3ケタ。そんな国で、こんなフェミニズム小説が大ヒット！それを、自身も子育て奮闘中の女性監督が映画化！

希望通りに就職できたものの、結婚、出産、子育ての中で退社。優しい夫は協力的だから文句は言えないし、自身の家族とも、夫の家族ともうまく付き合っているが、さて、“82年生まれ、キム・ジヨン”の今は？

あれもダメなら、これもダメ。ヒラリー・クリントンでさえ「ガラスの天井」にぶち当たったのだから、ジヨン程度のレベルでは、それもやむなし。そんな見方も当然だが、さて本作では・・・。

『パラサイト』(19年)を米国版でリメイクするのなら、本作も是非、米国版や日本版でリメイクを！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■大ヒットの同名小説を子育て奮闘中の女性監督が映画に！■

韓国で大ベストセラーとなった子育て中の女性を主人公にした同名のフェミニズム小説を、自身も子育て奮闘中の女性監督キム・ドヨンが長編映画に。韓国の美人女優チョン・ユミが演じるのは、タイトル通り、1982年生まれで、子育て中の女性キム・ジヨンだ。

ジェンダーギャップ指数の視点からは、北欧諸国が押しなべて上位を占めているのに対し、韓国は日本と共に遅れている。そのため、大企業に就職し、“希望の星”ともいえる唯一の女性チーム長を目指して一生懸命に働いていたジヨンも、妊娠、出産を機に仕事を諦めざるをえなかったらしい。キム・ドヨン監督は、本作でジヨンの幼少期、学生時代、就職、結婚、出産と、順を追って描いていく。まあ、いわゆる“寿退社”を、世間も家族もそして本人も幸せだと思えば、それでいいのだろうが、「どこか違う！」「いつか仕事に復

帰を！」「そのためにはどうすればいいの？」そう考えていると、アレレ・・・、いつの間にか、ジョンの精神状態は不安定になっていくことに。

■□■夫の視点は？両家族の視点は？■□■

ジョンのそんな病状(?)を心配しながら見守る夫のデヒョン(コン・ユ)は、直截的に病状を指摘することを避け、あくまで精神科への相談を勧め、一度はジョンもそれに応じた。しかし、治療費が無駄と考えたジョンは、結局通院しないことに。それにはデヒョンもがっかりだが、あまり強く勧めると逆効果だから仕方なし・・・。

本作でジョンの気持ちを正確に理解しているのは、たぶん同僚の女性ヘス(イ・ボンリョン)だけ。しかし、キム・ドヨン監督は、監督の問題意識を、ジョンとデヒョン夫妻双方の家族を登場させる中で、ジョンが悩み、もがき、脱出法を模索するのを共に考えさせる手法をとっている。

ジョンの家族は、父親ヨンス(イ・オル)、母親ミスク(キム・ミギョン)の他、姉ウヨン(コン・ミンジョン)、弟ジソク(キム・ソンチョル)だが、女二人のあとに男の子を授かった父親は、否応なくジソクだけに期待していたらしい。父親本人にその自覚がなくとも、3人の姉妹弟は、その仕打ちをしっかりと認識してきたのは当然だ。その象徴が、父親がジソクにプレゼントした万年筆のエピソードで描かれるので、それに注目。

他方、デヒョンの方は今時の若者らしく、それなりにジョンに気を遣い、「僕が育児休暇を取る。」とまで決意するが、それを聞いたデヒョンの母親は、ジョンに対して「私の息子に何をさせるの！」と激怒。なるほど、韓国では、それも当然かも・・・。

■□■復帰への道は？フルが無理ならパートでも。しかし。■□■

本格的な仕事への復帰が無理なら、家の近くのコンビニやデパートでも。そんな道もありだが、出世街道の途中にあったにもかかわらず、会社を辞めて自ら起業したチーム長から、「仕事を手伝ってくれない？」と言われると、ジョンの腕がムズムズし始めたのも当然。しかし、そこで働くには、ベビーシッターなどいろいろな準備が必要だ。根が頑張り屋のジョンは、デヒョンの協力も得てそれを前向きに進めていたが、その壁の厚さと高さは？

2016年11月の共和党トランプ vs 民主党ヒラリー・クリントンの大統領選挙では、予想を覆してトランプが当選。米国初の女性大統領誕生はおあずけとなった。ヒラリー・クリントンはそれを、“ガラスの天井”と呼んで悔しさをにじませたが、仕事へのフルタイムでの復帰はおろか、パートでも無理だとされたジョンの悔しさはいかばかり・・・？しかし、ヒラリー・クリントンにとっての“ガラスの天井”はとてつもなく高いところにあったが、ジョンにとっての“ガラスの天井”の高さは？また、その厚さは？

■□■米国版リメイクは？日本版リメイクは？■□■

2019年の第72回カンヌ国際映画祭では、ポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)『シネマ46』14頁)がパルム・ドール賞を受賞し、ハリウッドでのリメイクも決定しているらしい。近時は、どの国でも面白い企画、面白い脚本が不足してい

るから、『パラサイト』がハリウッドでリメイクされれば、アメリカ流の格差の広がりやどのように背景に取り入れ、どのように二つの家族を対比させていくのか興味深い。その点では、格差拡大が叫ばれる日本でもリメイク可能だが、何事もヤワで、韓国式のアクの強さがない日本では、『パラサイト』をリメイクしても、どこまで強く問題意識をアピールできるかは疑問がある。

しかし2016年に韓国で大ヒットし、130万部を超えるベストセラーとなった本作の原作は、22か国・地域で翻訳され、日本でも翻訳本が刊行された2018年11月以降、大ヒットしているそうだから、日本での本作のリメイクは十分可能。しかも、前述のように、ジェンダーギャップ指数の順位では、2019年の日本は121位、韓国は108位だから、ほぼ同じ。ジョンとデヒョン夫婦の2人だけの会話はもとより、この2人がそれぞれの実家で展開するストーリーの中で交わされる家族との会話は、ほぼそのまま日本版でも使えるものばかりだ。

ちなみに、お正月休みに妻は夫の実家に帰省するの？それとも妻の実家に帰省するの？両方ともに帰省すればそれが一番いいのかもしれないが、逆に、毎年両方ともに帰省するのは大変だ。そんな悩みを含めて、女性の社会活動のあり方や、女性の結婚、出産、子育てにそれなりの意見を持つあなたなら、本作は必見！

2020（令和2）年10月21日記